

対話における単位の考え方

— 倒置の表現をめぐって —

長 田 久 男

生4 きみは、んじや、ずっとあそこに、工場に勤めてるのか。

(生2に)

生2 勤めてるよ、ずっと。

生4 勤めるのか、卒業してからも。

生2 きまつてるよ。

(定時制高校生、男子二人の対話「ことばの現代風景」三一ページ)

「話し言葉は、書き言葉にくらべて、所謂、不整表現、むだな表現が多いといわれる。しかし、その不整表現、または、むだな表現は、話し言葉のもつ基本的な条件の反映であって、話し言葉の世界では無理からぬ存在であり、むしろ、立派な役割を果しているという見方が可能である。したがって、こうした表現に対して考察を加えることは、話し言葉の性格を明らかにする一つの方法である」という考えかたがある。

対話の中に、普通に見られる、いわゆる「倒置の表現」を対象に考察し、それに関連して「対話における単位は、どのように考えたらいいか。」についてふれたい。

二

対話における単位の考え方

右の中で①と②、③と④とが、お互に倒置されている。本稿では、①及び②を「倒置の表現」と呼ぶことにして、考察を進める。「倒置とは、文や連文節において、成分たる文節が、その言語における最も普通なあるいは慣用的な順序に反して位置をとる」④ことである。その考え方によると、「ずっと、勤めてるよ。」「卒業してからも、勤めるのか。」という論理的に整った文と対比して、「ずっと」「卒業してからも」が、文の一部分であり、それらが、普通の順序に反

して位置をとっているというわけである。また、倒置をとらなければならぬ理由は、一般に、表現的価値を示すに役立てるためのもので、意味を強めたり、特別な感情を表現したりするためのものであるという。すると、㊶あるいは㊷、㊸あるいは㊹のどれかによって、意味を強めているか、特別な感情を表現しているわけである。しかし、ここで、意味を強めるとか、特別な感情を表わしているとかいいうのは、「倒置しない文」、即ち、「ずっと、勤めてるよ。」「卒業してからも、勤めるのか。」との対比において言ったことである。要するに、「倒置」という考え方は、「文」という従来の単位観に支配されていることが指摘できる。

「対話」の特色を、二言語主体の、いわゆる「ことばのやりとり」、いかえると、話し手と聞き手との協同作業によって叙述が完結するところにあると見るとき「対話」のもつ基本的条件から、従来の単位観に支配されずに考察する必要がある。

△1▽ 倒置の表現の用いられる形式的な位置。

① 客一、夏、涼しい？

質一 ここは涼しいですよ、夏はア。

(「ことばの現代風景」一一五ページ)

② 予想一 だんなこないだお持ちになりませんか？

客一 こないだは来られなかった。二回とも。

(「ことばの現代風景」一四三ページ)

③ 質一 頭が痛くなっちゃった？ (笑う)

客二 うんほんと頭が痛くなんの、あたし。

(「ことばの現代風景」一一六ページ)

④ A それが二十六日？

母 ええ、で頭が痛いつて寝たんです。そして薬飲ましたんです。Hやさんの薬。そしたら七度に下りましてね。

(「ことばの現代風景」二二三ページ)

右の例で、あきらかな通り、同一発話者による連続した「発言」の中で、最初にくることはなく、必ず、二番目以下に位置する。即ち、①②では、二番目、③では、三番目、④では、四番目に位置している。なお、④のように、「倒置の表現」の次に、さらに他の「発言」が続く場合もある。

△2▽ 倒置の表現は、意味的に、どういう役割をしているか。

例①②③④の場合、倒置の表現は、その直前の「発言」に依存している。そして、直前の「発言」の叙述内容を、補足している。

⑤ 客一 もっと負けな、もっと。

(「ことばの現代風景」一一一ページ)

⑥ B 技巧は大したことないよ。トントトトトントトトトントト (三味線の口まね) それは大したことないけれどもねエ、しかし本能的にうまいさ、本能的に。

(「ことばの現代風景」二三一ページ)

⑦ A そりや掃除だったらね、一等国ぐらいになれるよ、

一等国。(笑)

(「ことばの現代風景」五四ページ)

⑧ 男A なんだこれ、ピヤ公じやないか、これ。

(「ことばの現代風景」八〇ページ)

例⑤⑥⑦⑧は、直前の「発言」内のある語句を繰り返したことに
よって、その部分を、強調しているといえよう。「直前」の発言内
のある語句を繰り返したという点で、この「倒置の表現」も、その
直前の「発言」に依存しているといえる。

⑨ 父 深いところへ行きやいけないよ、決して。
子 はい。

⑩の場合、語句の繰り返しはない。強調という点では、前の例と
同じである。だが、強調しているものが、直前の発言のいわゆる陳
述である。いわゆる「陳述の副詞」が用いられている。この場合も、
直前の発言に依存しているという点は前と同じである。

△3√倒置の表現の形態。

単語の形とか、文節の形とか言う点から言うと、今までの例から
あきらかなように、文節の形をとっている場合が多い。単語の
形、⑩・⑪のように連文節の形の場合もある。

⑩ 客二 違うわ(嘆息調で)、だってお金がいらないきや
ア、重役だけでも、ボーナスももらえないんじやな
いの、若い人にだけやつても。

⑪ 女二 気の毒よ。男女クラスの男子なんて。
〔ことばの現代風景〕一一七ページ)

直前の「発言」を、強調している場合は、語句の繰り返しか、陳述
の副詞という特別な形態をとっている。

つぎに、「倒置の表現」が、先行の「発言」と分離して、つまり、
「倒置の表現」がそれだけで独立性をもって表現されていることは、

対話における単位の考え方

樺島忠夫氏の調査研究がある。

△4√倒置の表現が、△1√に述べたような形式的位置をとって
るのはなぜか。

「倒置の表現」の位置を、「対話」のもつ基本的性格と関連して
考えたい。

⑫ 係2 四カ月で卒業というんで、全然タイム計ったこと
ないの?
女2 あるんです。十分間に。

⑬ 母 あのお先生、牛乳は下痢に悪いとかって。
A ふだん飲みつける人はさしつかえありません、五勺
ぐらい飲んでも。

⑭ 女A かわいらしい。あれはまだ若いやな。
女B 若いな、あれは。
〔ことばの現代風景〕一二五ページ)

⑮ 客四 千円足りないんだけどね。
質二 千円、困難ですわねエ、やっぱりねエ。
〔ことばの現代風景〕二一九ページ)

例⑫⑬⑭⑮で、それぞれ⑫が、倒置の表現である。それぞれの直
前の「発言」④と比べてみる。つまり、それぞれの「対話」におい
て、「こたえのことば」としては、この場合、⑫よりも④の方が必
要であると認定できる。ということは、「こたえ」を求める相手
⑫係2⑬母・⑭女A・⑮客四)の「発言」に対して、「こたえ」の

など。

⑬ 生3 四年間を通じてだな。(定時制は四年)

生2 精勤賞は何だっけ、ここは。

生4 エエとね。三エエ三十五時間か。

〔ことばの現代風景〕三〇ページ)

⑭ 質二 ええと年はおいくつですか、明治四十年といううと。

客三、四十・五かなんかやないんですか。

〔ことばの現代風景〕一一八ページ)

例⑬⑭の―線も、⑬の場合と同じである。

三

「倒置の表現」は、同一発話者による連続した「発言」の中で、最初にくることはなく、必ず二番目以下に位置する。そして、直前の「発言」に、意味的に依存している。

右のような事実から、「対話」と「対話における単位」はどのように考えたらよいか。を、つきに考えてみよう。

はじめに、「対話」と「対話における単位」に関する、私の考えの基礎になっている。阪倉篤義氏と、宮地裕氏の見解を述べる。

阪倉篤義氏は、論文「対話―戯曲のことば―」で、対話及び対話に関する単位的なものについて、およそ、つぎのように述べている。

1 話し手聞き手との協同作業によって叙述が完結するその一纏りを仮に「対話単位」と称することが出来よう。一対話単位の言い足りない所が、更に次の発話を導き、かくて対話は継続して行く。

「発言」としては、⑩系よりも、①系の方が優先する。こたえの発言としてよりふざわしい、より必要な、①系を、述べた次に、①系の叙述内容を、補足する意味で、⑩系が述べられていると思われる。

⑬ 係2 自転車乗れますか。

女2 自転車ですか。

係2 ええ。

女2 ええ、すこし乗れます。(終りが小声)

係2 乗れません?

女2 乗れます。

係2 乗れます。(確かめる)荷物つけられますか、自転車に。

女2 あんまり大きいのつけられないけど。

(「ことばの現代風景」九〇ページ)

例⑬では、⑩が「倒置の表現」である。直前の「発言」①と比べてみる。①は、「こたえ」を求める「発言」であって、「こたえ」の「発言」ではない点が、前の場合と違う。①に対する「こたえ」の「発言」は、女2「あんまり大きいのつけられないけど。」の⑬である。すると、「対話」の進行から見ても、「係2」は、相手「女2」が自転車に乗れることを確かめた次に、まず知りたいことは相手が、「荷物をつけられるかどうか」ということである。そのためには、①は、⑩に優先し、より必要なものである。「こたえ」を要求する「発言」として、必要な①を述べ、次に、①の叙述内容を補足する意味で、⑩が述べられていると思われる。この場合話し手、聞き手の間に存する共通の場に支えられて、⑩が添加されていることは言うまでも

2 話し手が発言（言語表出運動）をはじめからその発言を打切つて沈黙に移るまでを（表出された言葉を含めて）服部四郎博士の用語を借りて「発話」(utterance)と称する。

3 なお、発話の中には、幾つかの「文」に該当すべき「発話断片」よりなるものがある。

4 以上を例示すれば、

夫 金は持っているかい。

妻 それがもうすっかりなの。

夫 ぢや、これを渡しかう。さ十円。

妻 ありがとう。

夫 夜風はもう寒いよ。襟巻を持ってけ。

妻 ええ。

岸田国士「紙風船」

右の「会話」は、「三対話」からなっている。「発話」は、夫が、

三、妻が、三で、「六発話」からなっている。また、④③②①が、

それぞれ「発話断片」である。

宮地裕氏は、論文「文と表現文」で、会話における単位について、およそ、つぎのように述べている。

1 われわれの、現実の日常会話は、いわゆる「ことばのやりとり」に、種々雑多な様相を持つが、その「抽象的な型」として、いくつかの単位をとり出すことができるようにおもわれる。もとより、数時間におよぶ、ひとまとまりの会話も、一単位でありえようし、「はい」も一単位でありえよう。ここに、いわゆる「文」的な、比較的ちいさい単位として、 \wedge 対談 \vee \wedge 対話 \vee \wedge 発言 \vee

対話における単位の考え方

の別を、まず、立てようとおもう。それは「文」論のために、ひろい基礎となしうるとおもわれるからである。

2 たとえば、

A また御出張ですか？

B ええ。なかなか楽じゃありませんよ。

A そうですか。

とうい会話(の一部)についてみれば、④③②①が、それぞれ「一発話」であり、「④と③」・「③と②」が、それぞれ「二対話」、

「④③と③②」とが「一対談」である。結局、右は、「一対談」を構成し、「二対話」をふくみ、「四発話」より成る。

3 「一対談」とは、AとBという二言語主体の対等なことばのやりとり一回ずつの二回によるひとまとまりをいう。

4 「一対話」とは、一つの「こたえのことば」と「それをもとめる相手の一つのことば」から成り立つひとまとまりをいう。

5 「一発言」とは、たとえば④③②①③②①のような、それぞれのひとまとまりのことばである。

さて、阪倉、宮地両氏のいう「対話」あるいは「会話」における単位観は、従来の単位観にとらわれずに、対象としての、「対話」もしくは、「会話」をみつめるとき、肯定さるべき単位観であると思ふ。そこで、両氏のいう単位を整理するつぎのようになる。

A また御出張ですか。

B ええ。なかなか楽じゃありませんよ。

A そうですか。

対談	阪倉	宮地
対話	「イとロハ」また「ロハとニ」	「イロ」と「ハニ」とで
発話	「イ」また「ロ、ハ」また「ニ」	「イ」また「ロ」また「ハ」また「ニ」
発話断片	「ロ」また「ハ」	

右から、つぎのことが指摘できる。

1 両氏が、それぞれの論文の中で、最小の単位としている「発話断片」と「発言」とは、概念規定は別としても、対象としているものは、具体的には、同じものと思われる。

2 両氏の「対話」のとらえかたの相違は、「対話」を、構成する直接単位をどう考えるかという見解の相違と関係がある。

生4 ^イきみはんじや・ずつとあそこに、工場に勤めているのか。(生2に)

生2 ^ロ勤めているよ。ずつと。

生4 ^ハ勤めるのか、卒業してからも。

生2 ^ニきまつてるよ。

「倒置の表現」をふくむ「会話」の場合の両氏の「対話」のとり方は、つぎのように推定される。宮地氏は、①と②とで「対話」をなすとし、阪倉氏は、①と③とで「対話」をなすとし、具体的には、「倒置の表現」④の取り扱いに違いが生じる。

「一つの『こたえのことば』と『それをもとめる相手の一つのことば』から成り立つひとまとまりを「対話」とする宮地氏の場合、

「倒置の表現」④の「ずつと」は、「対話」構成には、直接参加しないことになる。すると、宮地氏という「発言」の中には、少なくとも「対話」構成に直接参加する「発言」と、直接参加しない、「発言」との別があるとしなければならぬ。

阪倉氏の場合、

発話の中には、幾つかの「文」に該当すべき発話断片よりなるものがあるが、その内容的分類は、発話の末尾に現われる「文」によって決定した場合が多い。しかし、倒置的な形をとる場合などは、勿論別に考慮を加える。

とあるので、④⑤を、「発話断片」とするのかどうかあきらかでないが、「文に該当する発話断片……」という記述から「倒置の表現」は「発話断片」に該当させていないようにも推定される。仮に、「倒置の表現」を、「発話断片」として認めているとすれば、先の例では、③と④とで「一発話」を構成し、この「一発話」が、他の「一発話」①と反応し合って、「二対話」を構成していることになる。したがって、阪倉氏の場合はっきりした記述はないが、「対話」を直接構成する単位は「発話」としているように推定される。

さて、以上の両氏の「対話における単位観」と、「倒置の表現」の特徴とから、「対話における単位」について、つぎのように考えることができるのではなからうか。

1 不整表現の一つといわれる「倒置の表現」を、成分の倒置としないで、「対話」における一単位として認める。

2 一単位として認めるとすれば、阪倉氏という「発話断片」、宮地氏の「発言」の位置を与える。

3 「発言」としての位置を与えられた、「倒置の表現」は、いかなる場合でも、「対話」を構成する直接単位にはなれない。

4 そこで、「対話」を構成する直接単位は阪倉氏のいう「発言」とする。

5 「発言」を構成する直接単位は、宮地氏のいう「発言」、阪倉氏のいう「発言断片」とする。「発言」の用語を用いる。

6 「発言」の中には、少なくとも、「一発言」で「一発言」を構成するものと、「一発言」では「一発言」を構成することのできないものとの別がある。

7 いわゆる「倒置の表現」は、右の場合、後者である。

なお、つぎのような問題が考察しなければならない問題として、後日に残っている。

1 いわゆる「倒置の表現」は、「発言」の一類型であるが、「発言」の類型は、他にいくつあるかについて。

2 類別された「発言」の相互関係について。

3 すべての「発言」の成立原理について。

4 以上のようにしてあきらかにされた、話し言葉の単位と、書き言葉の単位との関連について。(三三・八・二〇)

△注△

① 伊佐早敦子氏「はなしこにば序」・国語国文 二二三号

遠藤嘉基博士「話し言葉と書き言葉」・言語生活 二一号

大石初太郎氏「話しことばと文法」・日本文法講座 五

② 国語学会編「国語学辞典」六二ページ「対話」の項の「直接に

向かい合って話すこと。またその話・相対話とも」という意味に一応用いる。

③ 筑摩書房発行「ことばの現代風景」は、雑誌「言語生活」の中の「録音器」欄の中から二十二編を選んで一冊としたもので、日常談話をできるだけ忠実に文字化したものである。

④ 国語学会編「国語学辞典」六八五ページ 佐伯梅友氏執筆。

⑤ 右書 四四六ページ上、関本至氏執筆。

⑥ 注④と同じ。

⑦ 宮地裕氏「文と表現文」国語国文 二八五号 二六一ページ下

参照

⑧ 阪倉篤義氏「対話―戯曲のことば」国語国文 二四三号 二〇

ページ上参照。

⑨ ここに用いる資料は、多く「ことばの現代風景」中よりとった。

⑩ 注⑦論文四ページ上。

⑪ 樺島忠夫氏「倒置法の一効果―文の要素の分擬より―」国語

国文 二四四号

⑫ 注⑨論文、二〇ページ。

⑬ 注⑧論文の要約。

⑭ 注⑦論文の要約。

⑮ 注⑦論文四ページ上。

⑯ 注⑧論文一六ページ上。